

## 時を超えて 変わらぬ旭の心

学校法人旭学園 理事長  
内田信子

今年度、佐賀女子高校は幾度も喜びの報告に沸きました。ソフトボール部が全国選抜2連覇、14年ぶりに国体でも優勝を果たしました。合唱部は初めて「全日本合唱コンクール全国大会」で金賞及び1位にあたる文部科学大臣賞を受賞しました。この他にも運動部、文化部から好成績の報告が相次ぎ、県民の皆様からも祝福の聲が寄せられました。

3年生にとって高校生活は、新型コロナウイルス感染拡大によって、多くの学校行事が中止や縮小を余儀なくされた日々として思い出されるのかもしれませんが。例えば合唱部の3年生は入学後最初の大会が中止になったばかりか、大きな声で歌うことは出来ず、プラスチックのフェイスガードを付け、冬場も音楽室の窓を全開にして練習しなければなりませんでした。しかし、全国大会に出場した27人はそうした困難の中、樋口久子先生の厳しい指導に応え栄冠をつかみました。受賞報告会で、友添歩部長は「みんなの夢だったので（日本一は）凄く嬉しい。毎日が濃くて深い3年間でした」と喜びを語りました。ほのぼのとした印象を与える美しい笑顔でした。辛い日々だったからこそ一層、友情は深まり、困難に耐えた思い出は、これからの彼女達の人生をきっと支えてくれるに違いないと思えた瞬間でした。我慢と共にあった3年間かもしれませんが、振り返ると皆さんを成長させてくれた時間だったのではないのでしょうか。

今回、合唱部が全国大会で自由曲として歌ったのはポーランドの作曲家クシシュトフ・ペンデレツキによるミサ曲でした。同じ東欧のウクライナでは、ロシアの侵攻によって多くの血が流れ、数百万人の人々が避難民となっています。聴衆は彼女たちが想像の翼を広げ、歌の世界を表現しているのを感じ、感動されたのではないのでしょうか。そして、平和への祈りを共有されたのではないのでしょうか。苦しむ人々に思いをはせ、会場に響く清らかで美しい歌声。それはまさに今日の合唱の最高峰として選ばれるべき演奏であったと思います。

樋口先生は20年前から佐賀女子高校で合唱の指導をしてこられました。中学校での合唱指導で有名な先生ではありましたが、高校の合唱コンクールでは最初から好成績を残せたわけではなかったそうです。合唱の経験がない生徒が殆どの中、声作りから始め、曲にこめられた思いを表現できるまでに育てるのは、生徒へのあるいは音楽への深い愛情がなければ出来ないことです。先生が最後の舞台にと準備された自由曲が東欧の作曲家によるミサ曲となったのは偶然でしょう。それはウクライナ侵攻の前に決めておられたはずです。ですが地

上の争いを憂う神様が、このミサ曲が優れた演奏家によって天上に献歌されることを望み、生徒と樋口先生に祝福をもたらされたように私には思えてなりません。

もう一方の日本一、ソフトボール部の津上さおり先生に、このチームの特徴について問うた時、「才能というものはあるのかもしれませんが、この子たちは皆、素直でした」と答えられました。2つの部に共通している姿として脳裏に浮かんだのは、旭学園に伝わる女性像でした。

「その人のいるところ常にほのぼのとしたものがただよい、その人は美しいものにすなおに感動し、何人からも何ものからも何かを学びとることのできるすなおな心を持ち、いらだちやつぶやくことなく生きることに感謝できる人。」日々唱えられて来たこの言葉が、知らず知らずのうちに生徒達の心に浸み込んでいたのではないのでしょうか。そうであるとすれば、これほど嬉しいことはありません。

旭学園は創設者中島ヤス先生が1897年（明治30年）に家塾から起こされた学校で126年の歴史を持ちます。その間に価値観は変わり、女性の生き方も変わりました。ですが変わらぬものもあるのです。AIが人間を凌駕されると言われる今日にあっても、私達はその変わらぬものを大事にしたいと思っています。

「その人のいるところ常にほのぼのとしたものがただよい・・・」皆さんが唱える旭学園が目指す「女性像」があなたの姿と重なったとき、きっとあなたの周りは温かい空気に包まれ、あなた自身も幸せに包まれていることでしょう。

佐賀女子高校での日々が、あなたの幸せな人生の礎となることを願ってやみません。